

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

タイトル：「アフリカに関する史的研究と資料」（平成 27 年度第 1 回研究会）

日時：平成 27 年 6 月 20 日（土）午後 1 時 00 分より 5 時 30 分

場所：東京外国語大学本郷サテライト 3 階

---

網中昭世（AA 研共同研究員／アジア経済研究所）

「文書史料と非文書史料の交差—植民地期モザンビーク農村社会に関する調査から」

植民地政府の文書史料が残る近現代でさえ、アフリカ農村社会の歴史を生活者の視点から描くうえで入手可能な史料は限られている。その一方で、記録者・保有者の異なる文書史料と非文書史料（オーラル・ヒストリー、遺物など）を組み合わせることにより、分析の視点は多元的になり、調査対象とする社会をより立体的に描く可能性を秘めている。

本報告では、参考文献として挙げる拙論執筆の過程において実施したモザンビーク農村調査に基づき、その際の手法と成果を紹介した上で、調査上の制約・残された課題について示した。

質疑応答では、事例で確認された農村部女性を担い手とする外来知と在来知の融合、人の移動と政治活動への展開といった社会変容の可能性、現代に至るまでの当該社会の政治社会史における事例の位置づけなどについて議論がなされた。

参考文献：網中昭世「モザンビーク南部の移民送り出しとその社会的影響の地域的多様性—植民地期のアルコール市場をめぐる競合と排除」『アフリカ研究』No. 76, 2010 年, pp.1-15.

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/africa/2010/76/2010\\_1/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/africa/2010/76/2010_1/_pdf)

---

坂井信三（AA 研共同研究員／南山大学）

「西アフリカのムスリム・コミュニティにおける文書活動研究の可能性」

はじめに

西アフリカ内陸地方の歴史史料を論じる場合、大きく分けて三つのカテゴリーの史料が区別できる。第一は西欧語による文書史料、第二はアラビア語による文書史料、そして第三は口頭伝承史料である。この発表では、そのうち第二のアラビア語文書史料を取り上げ

る。

西アフリカ内陸地方に関しては、過去 20 年ほどの間にアラビア語文書史料の収集とカタログ化が大きく進んだ (Kane 2003:8-18)。とくに Hunwick による *Arabic Literature of Africa*, vol.4, *The Writings of Western Sudanic Africa* (2003) の編纂によって、ニジェール川中流域、セネガンビア、ギニア高地、ヴォルタ川流域を含む内陸サバンナ地方におけるアラビア語文書の分布状態を、大きく鳥瞰的に見渡すことができるようになった。

そこから浮かびあがってくる様相を簡単に先取りしていうと、

1. 西暦 15 世紀頃から今日までの間に、西アフリカ内陸の各地でアラビア語文書の生産がおこなわれていたが、その地域的な分布状態にはかなりの偏りがある。
2. 時代的にみても、文書の生産活動には隆盛や衰退などの変動があり、文書生産の中心地が時代とともに移動していく様子が見られる。

ただしカタログに見られる空間的・時間的分布状態が、文書の在・不在をそのまま反映していない可能性にも注意しなければならない。文書には、もともと公開あるいは流通することで意義をもつものと、反対に秘匿されることに意義があるものがあるからだ。さらに (外部の) 研究者がもってきた関心のあり方も、文書の認知に大きく影響している可能性がある。西アフリカ内陸の歴史研究・社会研究は、従来主として英仏の人類学者と歴史学者が担ってきたが、1970 年代末まで両者の問題構成や研究手法にはかなりのちがいがあったのである。

文書のカタログ化から読みとれることでもうひとつ注目したいのは、

3. 20 世紀にはいつてから、現地の学問伝統を受け継ぐ学者と欧米の研究者とのインタラクションが、新たな文書の生産を促したこと、である。

西欧中心的視点とは異なった視点をもつその種の文書が、アカデミズムにおけるアフリカ史研究に対して、あるいは現代アフリカの歴史生成にとってどのような意義をもつのか、その検討は今後、西アフリカ史研究の重要な課題になるだろう。

この発表では、主に上記の 1 と 2 について検討し、3 の点については英仏の研究のちがいの関係で簡単に触れることにしたい。

## 1. 文書活動

歴史史料論という観点からすると、現存する過去の文書が歴史研究にとってもつ価値から見た特性や限界が問題とされるのだろう。しかし社会人類学の観点から文書を研究するならば、それを生み出す社会にとっての文書の意義がまず問われなければならないだろう。

こうした議論が、西アフリカをフィールドとする社会人類学者・歴史学者によって早くから提起されていたことは注目に値する。現在のガーナ北部を対象とし、西アフリカ内陸の歴史と社会について多くの著作を残した社会人類学者 J. Goody は、リテラシーを「知性の社会的テクノロジー」としてとらえ、それが多くの伝統社会において特定の集団やカテゴリーの人々の間に限定されたかたちで存在する様態を”restricted literacy”という概念を使

ってとらえ、これを論集にまとめた (Goody 1968)。のちに言及する歴史学者 I. Wilks も、この論集に重要な貢献をしている (Wilks 1968)。

Goody の議論は、その後 W. Ong の口承文化と書字文化の歴史的変遷の研究 (Ong 1991[1982]) と結びあわされて展開される一方で、開発研究の文脈での心理学的・認知科学的リテラシー研究に批判的に継承されていった (中村 2009a)。こうした議論の流れを踏まえつつ、人類学における新しいリテラシー研究を提示した中村は、認知の道具としての文書をその生産から記録、保管、参照、破棄までの循環プロセスから捉えることを提唱している (中村 2009b)。

中村の議論は現在の途上国における文書を対象としているが、こうした文書の循環プロセスは過去の社会においてもみられたはずである。ここではその観点を援用して、文書の実産から流通、参照、転用、廃棄までの社会的過程に視野を拡大し、その全体を「文書活動」とよぶことにしたい。そうすることで、現時点から見て過去の文書が存在するかどうか、またそこからいかに過去の情報を引き出すかという観点から文書の史料学的意義を評価するのではなく、それが現地の人々の社会生活の中で生産された時点から史料として立ち現れる時点までの経過と経緯全体から、文書の存在意義を (あるいはその意義の喪失を) 考える視点をもつようにしたい。

さらにいえばこの視点は、収集された文書を史料として取り扱う研究者の活動にも拡張されうる。つまり地域社会で存在意義を失い、その生活的コンテクストを失った文書がアカデミズムの場で史料としての意義をもつことになるような文書の再利用の様態も、視野に収めることができる。西アフリカのケースに即していえば、現地の文書活動によって生み出された文書は、現地の言語環境から発して欧米の言語環境にも関わりをもってくるわけだが、ここでは必要に応じてそれぞれの文書を取りまく言語環境を、アラビア語の文書システム、欧米語の文書システムとして言及することにした。そうすることで、西アフリカの文書活動の社会的・歴史的意義を、現地社会と欧米の社会との異なる文書システム間のインタラクションを含めて、動的かつ循環的なプロセスにおいて考察することが可能になるだろう。

もっとも私には、現時点でこうした観点を全面的に展開する準備も能力もない。そこでここでは Hunwick のカタログを例に使いながら、西アフリカのアラビア語文書の人類学的研究の可能性を、あくまでも試論として考えてみることにしたい。

## 2. 分布の状況

別表は、Hunwick のカタログをもとに 2003 年時点で把握されている文書の分布状況を整理したものである。ただし、これはあくまでも文書の量的な分布状況で、文書のカテゴリーを判定してその地域的、時代的分布を整理したものではない。アラビア語文書の題名からそのカテゴリーを判定することは、私にはできない。また、やがて明らかになるようにこのカタログはけっして網羅的なものではない。だがそれにしても、さしあたり西アフリ

カ内陸地方における文書活動の変遷の全体的な傾向を知るには役に立つだろう。

そこから気づかされる点を、既知の歴史の変動に関係づけながら指摘してみよう。

## 2-1. ニジェール川中流域＝マリ中央部

まずニジェール川中流域＝マリ中央部について見ていこう。

1. 西スーダン全体で確認できる最古の文書は、マンサ・ムサの命によってトンブクトゥにモスクを建設した14世紀半ばの *al-Sahili* (c.1290-1346) のもので、それ以前のもの残っていない。
2. 現存するトンブクトゥの主要な文書群（16世紀）の担い手は、ベルベル人（サンハージャ）のアキート一族で、その代表的人物が *Ahmad Baba* (1556-1627) である。
3. 13～14世紀のマリ帝国時代に、ジャ、ジェンネなど内陸デルタの都市で展開したはずのワンガーラの文書活動の痕跡は、今日ほとんど失われている。しかし、16世紀のトンブクトゥでサンハージャの学者たちを養成したのがワンガーラのウラマーたちだったが、トンブクトゥの文書からわかる。
4. 1591年のモロッコによる占領をきっかけに、トンブクトゥの文書活動は衰退する。17世紀をとおしてトンブクトゥの学問的文書の生産は停滞するが、この時期に *Ta'rikh al-Fattash* (1591まで、1664/5頃に再編集)、*Ta'rikh al-Sudan* (1655まで)、*Tadhkirat al-Nisyan* (1737/8まで) などの歴史書がトンブクトゥで書かれる。
5. ふたたび文書生産が活発になるのは、18世紀末から19世紀初めだが、文書活動の中心は都市を離れて、サヘル北辺のモールやトゥアレグの牧畜民キャンプに移る。その中心人物はクンタの *Sidi al-Mukhtar al-Kabir* (1729-1811) で、カーディリッヤのスーフィズムと法学研究を結合したそのスタイルは、19世紀をとおして西スーダンの学問的イスラームの標準的なモデルになる。
6. 19世紀はまた、ニジェール川中流域で大規模なジハードがおこった時期でもある。それにとまなう文書活動が、*Shaykh Amadu* (*Amadu Lobbo*, c.1776-1845)、*al-Hajj Omar* (c.1794/5-1864) の二人の学者＝スーフィーを中心に活発化する。
7. その後ニジェール川中流域＝マリ中央部の文書活動は、20世紀の植民地支配下（1895以降）で全般に不活発になる。ただし1930年代頃から、イスラーム教育の近代化を求めた人々がセゲー、カイ、シカソ、バンジャガラなどの植民地都市で比較的活発な文書活動（フランス語によるものを含む）をしていることには注目しておきたい。

## 2-2. セネガンビア

マリと比べてセネガンビアの文書活動に見られる目立った特徴は、

1. 植民地支配下で際立って活発化したこと
  2. スーフィー・タリーカの活動と密接に関係していること、の2点である。
- マリのアラビア語文書活動は14世紀期から現代までに及んでいるものの、最盛期はすで

に過ぎている印象があるのに対して、セネガンビアの文書活動はフランスの軍事的支配が始まる 19 世紀末から独立をへて現代に至るまで、ますます活発化してきた傾向が見られる。それは、現代セネガルのイスラームがティジャーニッヤ、ニアスイッヤ、ムリーディッヤなど、勢力を分け合うスーフイー・タリーカの競合によって展開してきたことと深い関係があるだろう。Hunwick のカタログで見る限り、三つのスーフイー・タリーカ関係の文書数の合計 (625) は、それ以外のもの (105) の 6 倍に及んでいる。

### 2-3. ギニア

フータ・ジャロンのジハードを経験したギニアのイスラームは、19 世紀のイスラーム史をセネガル・マリと共有しているが、その文書活動は量的にはそれほど多くない。しかしそこには他にはない特徴も見られる。それは、

1. アラビア語文書とフルベ語 (fulfulde) によるアジャミー文書が、19 世紀から植民地支配下において生産されたこと  
である。フータ・ジャロンでは、大衆的なイスラーム教育を目指してアラビア文字によるフルベ語の正書法が考案されたことが他のジハード国家と異なった特徴である。

### 2-4. ヴォルタ川流域

ここでいうヴォルタ川流域とは、コートジボアール、ブルキナファソ、北部ガーナを含む一帯で、歴史的にはニジェール川中流域からアシャンティ、ハウサの地域に向かう交易網にそって移住したムスリム商人集団ジュラの活動領域を指している。その文書活動の中心である Saghanugu クランの学者たちが、コン、ボボジュラソなどに拠点をつくり、そこからさらにブナ、ボンドゥク、ワ、サラガなどに学問伝統を伝承している。他地域と比較して気づくことは、

1. 学問伝統の継承関係をしめすイジャーザが文書の中で一定の位置を占めている。
2. ゴンジャ・クロニクル (*Kitab ghanja*) に代表されるような年代記製作の伝統がある。
3. ハウサの交易圏との接触によってハウサ語のアジャミー文書も少数ながら見られる。などの点である。

現代ガーナとしてまとめられている活動は、主として第 2 次世界大戦以後に北アフリカや中東との交流から生まれてきたもので、19 世紀以来の西アフリカの歴史を背景にもつ文書活動は、ほぼ植民地時代をもって終了しているとみてよい。

## 3. 文書活動の諸相

以上、文書の地理的・時代的分布を概観した上で、西スーダンの文書活動の諸相についていくつか指摘してみよう。

### 3-1. ワンガーラの文書活動

西スーダンの文書生産を歴史的な経過から見てみると、まずマリ帝国時代、14・15世紀に内陸デルタのジャやジェンネを中心としていた活動が、その後16世紀にアスキア朝ソンガイ帝国下でサヘルのトンブクトゥに移ったことがわかる。この変動は、政治権力がニジェール川中・上流域のマリンケ人から大湾曲部のソンガイ人の手に移ったことに対応しているだろう。ソンガイ帝国下でトンブクトゥの学問はベルベル系のサンハージャ（アキート）が担うことになる。ワンガーラの学問的伝統は当初アキートに受け継がれたが、その後次第に薄らいでいったようだ。

一方 Wilks は、ヴォルタ川流域地方のジュラによる19世紀の文書、とくに一連のイジャーザからワンガーラの学問伝統を復元できることを示している。彼はそれを、伝統の開祖と伝えられる al-Hajj Salim Suwari（盛期は15世紀末）の名をとって *Suwarian tradition* と呼んだ。その特徴は、マーリキー派法学の学習と平和的手段によるイスラームの普及を重視することにある。Wilks はこの *Suwarian tradition* の存在理由を、モロッコの侵略によってトンブクトゥから離散し、ヴォルタ川流域の交易路沿いに移住したワンガーラの学者たちが、当時のイスラームの中心地から遠くはなれた異郷＝異教の地にあつて、在地の政治権力と協調しつつムスリムのアイデンティティを保持するために学問研究の伝統を活用したことに見出している（Wilks 2011）。実際彼らの文書活動の大半は、古典的なマーリキー派の文献の再生産であつて、オリジナルな解釈書の執筆はほとんどなされていない（Hunwich 2003:540）。イジャーザが文書活動の重要な要素になっていたことも同様の事情を示しているだろう。彼らの文書活動は、交易路上に点在するジュラがコミュニティの核となるイスラーム学者を再生産するために組織したものだったと見ることができる。

ところでジュラの文書からは、al-Hajj Salim Suwari の活動地が内陸デルタのジャだったことがわかる。ところが当のジャでは、ワンガーラの伝統は今日ほとんど忘れ去られており、かろうじて Salim Suwari の名がだけ記憶されているにすぎない（坂井 1997:270）。ニジェール川中流域でワンガーラの学問伝統が失われた事実は、どのように解釈されるだろうか。

私がジャで調査した限りでは、19世紀半ばにボゾのスーフィー Alfa Boari Karabenta が *Mukhtasar Khalil* を再導入するまで、ジャの法学研究はほとんど廃れていた（Sakai 1994）。Hunwich のカタログには、ジャに由来する文書は年代不明の数点が含まれるだけである。一方不思議なことに、このカタログにはジェンネの文書はまったく収録されていない。それ以外に18・19世紀ニジェール川中流域の代表的なムスリム商人であるマルカの文書も、このカタログには含まれていない。2000年代初めまでの研究状況では、18・19世紀のニジェール川中流域の文書活動は、ジハード関連文書をのぞいてほぼまったく把握されていなかったようである。

この欠落が何を意味するのかは、この時期にニジェール川中流域でおこなわれていた文書活動の性質と、それに対する20世紀末までの外部の（とくにフランスの）研究者のアプローチの仕方と、両方から検討してみなければならない。

### 3-2. 秘匿される呪術的文書

19世紀末のジャについて Marty が「この町はつねにニジェール川中流域の護符作成センターとして知られていた」(Marty 1920, t.2:165) といっているとおり、ジャのイスラームは呪術によって広く知られていた。上述のように、ジャは15世紀末まではマーリキー派法学の研究センターであったらしいが、その後法学研究は衰退して呪術がその文書活動の中心になったようだ。

この点について私は前著で、モロッコの侵略によって内陸デルタが政治的混乱に陥る中でジャの離散がおこり、その後、防衛のために非イスラームの戦士クランを王として受容したジャは、そのイスラームの性格を変化させたという解釈を示しておいた。イスラームの呪術、とくにクルアーンの章句と文字を操作しておこなう文字呪術 (*asrar*) は、ムスリムだけでなく非ムスリムからの需要も非常に多かった。そのために、ソンガイ帝国の退潮後非イスラーム的な傾向の強い諸集団が勢力を伸ばしてきたニジェール川中流域では、ムスリムの文書活動の中心が法学研究から護符の作成に代表される呪術的活動に移行したことはあり得た変化だろう。紙の現地生産が行われなかった西スーダンでは (Bloom 2008)、紙が非常に貴重品であった当時でも、護符の作成はそのコストに見合うだけの大きな利潤を生む活動だったのだと思われる。

上述のとおり交易路沿いに点在するジュラは、ムスリム・コミュニティの維持のために法学研究を利用した。彼らの社会は、実際にはシャリーアを適用する可能性をもっていなかったが、法学者を養成する活動自体が周囲の非イスラーム住民との差異を維持・強化するのに役立てられたのである。それに対比していえば、ソンガイのようなイスラーム国家が崩壊して法学研究が社会的な意味を失ったとしても、すでに十分イスラーム的な慣行が浸透していたニジェール川中流域では、地域の人々の需要に答える文字呪術が学者たちにとって重要な文書活動になったのだろう。文字呪術は、セゲー王国のような奴隷生産戦争に特化した非イスラーム的な国家との有力な交渉手段でもあったにちがいない。

Goody は *Literacy in Traditional Societies* の序論で、伝統社会においてリテラシーの普及を限定する第一の要因として、呪術的知識に関連する「秘密」に言及している (Goody 1968:11-20)。西アフリカのムスリムにとっても、秘密は呪術に関わる文書活動において重要な要因だった。とくに呪術が学者の生業活動となっている場合、呪術的知識は象徴資本として取り扱われ、独占と特権によって守られることになる。また呪術的文献は、それを利用する本人が師のもとで自ら筆写したものでなければ効果を発揮しないと信じられているので、たとえ著名な文献でも秘蔵され、流通しにくい。だからこの種の文書は、存在するとしても非常に表に出てきにくい傾向がある。

1990年代の調査時に、私はジャで複数の学者から「昔の文書は白人に盗まれないように埋めてしまった」、あるいは「破棄してしまった」という言葉を何度か聞いた。これはおそらく事実というよりは、文書を秘匿しようとする言い訳だったのだろう。2000年代になって再訪したとき、トンブクトゥの古文書が世界の関心を惹いていることを知った新しい町

長は、ジャの古文書調査の意向を示したがそれは今のところ実現していないと思う。

ジェンネについては、2004年からは British Library による”The Endangered Archives Programme”が動き出して、3000近い文書の存在が認知されている。2014年に出版されたその報告を残念ながら私はまだ見ていないが、2009年の Sophie Sarin による予備報告 ([http://eap.bl.uk/downloads/eap269\\_survey.pdf](http://eap.bl.uk/downloads/eap269_survey.pdf)) によると、トンブクトゥの文書と異なって、認知されたジェンネの文書の約半数は呪術に関するものだという。ジェンネの住民はそれらの文書の提供に対して強い危惧と抵抗を示し、調査は難航したという。ニジェール川中流域では、17世紀以降に呪術的活動の重要性が増していく中で、本来秘匿性が高くない種類の文書についても、呪術文書と同様の態度がもたれることはあり得ただろう。それがこの時期、この地域に文書史料が欠落しているように見える理由の一つではないだろうか。

このように見てくるなら、ニジェール川中流域は18世紀以降においても実際には重要な文書活動の中心地だった可能性が出てくる。だがそれはこれまでの歴史研究、文書研究の関心を惹いてこなかった。その背景には欧米の研究者の態度も関与している。とくにフランスでは、後述のように Houdas と Delafosse によるトンブクトゥ年代記の校訂・翻訳によってマリ・ソンガイを中軸とする標準的な歴史像が作られて以来、それ以外のアラビア語文書史料に対する関心が薄れ、中でも呪術関連の文書は資料価値の低いものとして顧みられなくなった傾向があるのである (Triaud 2010:931, Kane 2003:29-30)。

それにしても、これまで秘匿されてきた呪術関係の文書が2000年代に入って少しずつ研究者の目に触れるようになってきたということは、マリの社会において呪術的な文書活動が終焉のときを迎えつつあることを意味しているのかもしれない。こうして現地社会における生命を終えた呪術文書はアカデミズムの世界で史料として価値づけし直され、やがて別の経路で改めて現地社会に環流することになるのかもしれない。

### 3-3. 年代記の作成

16世紀末のモロッコによる占領をきっかけにトンブクトゥの文書活動は衰退し、17世紀をとおしてトンブクトゥの学問的文書の生産は停滞するが、この時期に重要な年代記がトンブクトゥで書かれている。それらの年代記の中で、とくに *Ta'rikh al-Fattash* と *Ta'rikh al-Sudan* は、現地のウラマーたちにとっても、西欧の歴史研究者にとっても、西スーダンの歴史の規範的な著作となる。

西スーダンのウラマーたちにとって17世紀の歴史書が規範的な重要性をもったことは、たとえば19世紀のソコトの Uthman dan Fodio とマーシナの Shaykh Amadu がイスラーム国家を建設するに際して、それらの歴史書に描かれたソンガイに国家統治の一つのモデルを見出していたことからうかがうことができる。そのことを前提として、Shaykh Amadu が *Ta'rikh al-Fattash* の記述を改竄したこともよく知られていることである (Levtzion 1971)。Hunwich は *Ta'rikh al-Sudan* の著者 al-Sa'di のアラビア語散文のたどたどしさに17世紀トンブクトゥの学問の全体的衰退傾向を読み取っているが (Hunwich 2003:10)、そうした衰退



の中であって学者たちがソングアイの統治を懐かしみ理想化した懐古的歴史観が、のちに 19 世紀のジハーディストたちによって復古主義的なイスラーム改革運動をリードする歴史観として再生するのである。

一方、西欧による西スーダンの歴史像形成においてこれらの歴史書の翻訳・出版がもった意味については、最近 Triaud (2010) が論じている。

*Ta'rikh al-Sudan* は 1853 年にドイツの H. Barth がトンブクトゥを訪れたときにその存在を知り一部を筆写して持ち帰ったことから、また *Ta'rikh al-Fattash* はフランスのジャーナリスト Felix Dubois がトンブクトゥで 1895 年にコピーを入手したことから、西欧世界に知られることになった。これらの著作は、Ecole des Langues Orientales vivantes 教授 Octave Houdas とその娘婿で仏領西アフリカの行政官となる Maurice Delafosse によって校訂・翻訳され、出版された (*Sudan* :1898-1900, *Fattash* :1913)。

Triaud は、これらの歴史書の翻訳・出版がもった意味について、仏語訳 *Ta'rikh al-Sudan* の Houdas による序文の一節に注目している。すなわち「(この「スーダンの歴史」は) 進歩という点でいかなるイニシアティヴも拒絶されてきたこれらの人々が、異人種の民族によって押し寄せられたのではない固有の文明 (*une civilisation propre*) をもっていたことを示している。・・・結局それは、これまで歴史からまったく遠ざけられていた諸民族の団を、人類の全体的な歴史に結びつけるのである」という文章である。Houdas と Delafosse の二人にとって、これらの歴史書の出版は未開野蛮で歴史をもたないとみなされていたアフリカを、人類の世界史の中に位置づけようとする一種の「ヒューマニスティック」な意図をもっていたのである (Triaud 2010:918-919)。同じ歴史的テキストが現地のウラマーと外部の研究者によって、このように異なった文脈で再利用されたことは、転生していく文書史料の興味深い一側面を示している。

なお、Triaud が見落としている歴史書の翻訳・出版がもった意味について、断片的なエピソードの紹介しておきたい。私はジャでもトンブクトゥでも、現地のウラマーがこれらの歴史書のフランス語訳の部分を持ち離し、アラビア語本文のみを利用している様子を目にしたことがある。フランス語を話すにしても読み書きはできないマラブーたちにとって、Houdas と Delafosse の訳書は訳書としての意味を持たず、印刷物としてだけ意味をもっていたといえる。欧米の言語の文書システムによって校訂され、テキスト化され、印刷物となったアラビア語文書が、こうして現地の文書活動に還流するという経路もあるのである。

### 3-4. 地方史、家族史の作成

上の歴史書のような包括的なものではないが、各地のムスリム・コミュニティはそれぞれに家族的、地域史的な文書を作成していることがよくある。

Hunwick によれば、ヴォルタ川流域に分散したジュラのコミュニティは歴史記録を残す伝統を豊かにもっている (Hunwick 2003:3-4)。同様の歴史記録は、やはりニジェール川中流域からセネガンビアに移住したジャカンケにも数多く見られる (Sanneh 1989)。ヴォルタ

川流域の *Gonja Chronicles* について Wilks ら (Wilks, Levtzion and Haight 1986:18) が、フータ・ジャロンのジャカンケについて Salvaing (2003:497) が指摘しているとおおり、これらの歴史文書は口頭伝承と密接な関係がある。こうしたケースでは、口頭伝承と文字記録との循環プロセスが検証できるかもしれない。

### 3-5. アジャミー文書の作成

植民地化以前の文書活動でもうひとつ注目しておきたいことは、フルベ語、ウォロフ語、ハウサ語などのアジャミー文書の作成である。

とくにギニアのフータ・ジャロンでは、ジハードによって成立した国家の中でフルベ語によるイスラーム教育を目的にアジャミー文書が数多く生産された。その際 Salvaing によると、アラビア語が文法論、法学、エゾテリズム、スーフイズム文献などで使われたのに対して、フルベ語は子ども、とくに女子のためのイスラーム教育、宗教的な賛歌、詩文などに用いられた (Salvaing 2003:495)。前者がウラマーによるテキストの読解や解釈に関わる活動であるのに対して、後者は多くの場合共唱される口承文芸の文字化であり、イスラーム知識の専門家ではない一般信徒のための宗教教育の媒体として、あるいは宗教儀礼において用いられたことがわかる。文字化された文書は、その言語によって異なった領域で異なった仕方でも利用されていたわけである。しかし全体的に見て、西スーダンのアジャミー文書生産はナイジェリアのソコトに見られたほどに盛んではなかったようだ。

### 3-6. 植民地支配下の文書活動

#### 1) スーフイー教団

18 世紀以降の西スーダンの文書活動の中心は、アザワードのモール人スーフイーたちのもとに移り、19 世紀にはそれと並行してフルベ、トゥクロールのジハード国家でも活発化する。これらのうちとくに後者は、1980 年代以降英仏の西アフリカ史研究者たちの主要テーマになり、これまでに詳しく研究されてきているのでここでは言及しない。

それに対して 19 世紀末から 20 世紀前半の植民地支配下で、西スーダンの文書活動は新しいフェーズを迎えたように見える。それがもっとも目覚ましく現れるのは、セネガルのスーフイー教団においてである。

実際、Hunwich のカタログで見るとおり、セネガルのティジャーニッヤ、ニアスイッヤ、ムリーディッヤの生産した文書の量は、それ以前の時代の西スーダン全体に匹敵するほどに大きい。これは、近代化とともに紙の入手がはるかに容易になったことを考慮に入れたとしても、目覚ましい変化である。スーフイー教団はもちろん植民地化以前から西スーダンに伝播し、とくにアル・ハジ・オマルのジハード運動では大衆動員に大きな力をもった。だがスーフイー教団の社会的な役割が大きくなったのは、植民地支配下においてだったように見られる。

Triaudによると、フランスはアルジェリア統治の経験をサハラ以南アフリカにも適用しようとした。その「アルジェリア・モデル」は、東洋学的なイスラーム研究と民族学的方法を用いて、統治対象となる人々をスーフィー教団単位で掌握すると同時に地域的あるいは民族的集団として実体化するものだった。だがアルジェリアの *Bureau Arabe* で訓練された官僚たちは、1880年代のセネガンビアで「アルジェリアのザーウィヤに相当するようなものがスーダンにはない」という結論に達していたという (Triaud 2010:924)。

ところが植民地統治が進行する中で、スーフィー教団は実質的な社会集団として成長してくる (坂井 2005)。その間の事情を、Triaud は論文集 *Le Temps des Marabouts* (1997) の序論で次のようにまとめている。「フランスによる征服と占領に原因する完全な転覆の中であって、マラブーたちは連続性、アイデンティティの確保、変化への自発的な手がかりを同時に体現した。全般的な騒乱の中でマラブーと出会った大衆たちにとって、彼らは危機の時代における不動の定点、神意による力、正統性を表していた」 (Triaud 1997:11)。

Malik Sy (1855-1922) の指導するティヴァワンのティジャーニー教団、Abdullahi Niasse (1848-1922) が創始した同じくティジャーニーヤの一分派ニアセン教団、Amadu Bamba (1853/4-1927) が創始したムリッド教団は、相互に正統性を競い合いながら植民地支配下で成長した。Hunwick のカタログに見るとおり、その過程で大量の宗教文書が生産され、印刷され、流布されている。ところで興味深いことに、それらの印刷出版地を見ると教団ごとに明らかな傾向がある。ニアセン教団はナイジェリアのカノ、Malik Sy のティジャーニー教団はセネガルのリュフィスク、ムリッド教団は圧倒的にダカールが多い。すなわちそれぞれの教団は、アラビア語活版印刷技術が導入された植民地都市を基盤に、西欧の文書システムを利用して文書活動を活発化させているわけである。

ところがこれらのスーフィー教団の生産する大量の文書が、同時代のフランスの研究者の関心を惹くことはほとんどなかった。それにはまた別の背景がある。

ふたたび Triaud によれば、アルジェリア・モデルを適用できなかったフランスの (北アフリカ研究を背景にした) 東洋学研究者は、サハラ以南アフリカのイスラームを北アフリカ・中東のイスラームより劣った低級なものとみなし、研究対象から外してしまった。一方、1930年代以降 Marcel Griaule を中心に活動を活発化させたフランス民族学は、植民地支配下で拡大するイスラームを西アフリカの伝統文化の敵とみなして、これまた研究対象から除外してしまった (cf. 坂井 1986:558)。そのかわりサハラ以南のイスラーム研究は、純粹に植民地統治上の必要から *Bureau des Affaires musulmanes* 「ムスリム事情局」が担当することになったのである (Triaud 2010:911)。

植民地のイスラーム政策の中心的な関心は、反西欧的な中東のパン・イスラミズムの流入の阻止にあった。こうして中東から切り離されたサハラ以南のイスラームはムスリム事情局によって *Islam Noir* と名づけられ、行政的な管理と監視の対象になる (Triaud 2014)。ムスリム事情局の Paul Marty は、1910年～20年代に地方行政のルートで収集される膨大な情報を利用して仏領西アフリカのイスラームに関する百科全書的なモノグラフを書いている

る。その膨大な情報は今日植民地期のイスラーム史研究に不可欠のコーパスをなしているが、同時代の歴史研究者や民族学者の学問的関心の対象になることはなかったのである。

## 2) 現地のウラマーによる歴史記述

ところがこうした動きとは別のところで、植民地支配下で西欧の研究者との交流から現地のウラマーたちによる新たな歴史叙述が生まれてくる局面もあった。その発端は、アルジェリアでの経験をもつ Louis Faidherbe 総督が、セネガンビアの統治にあたってアラビア語を行政言語として活用しようとして、現地のウラマーを通訳や教師として登用したことにある。セネガル北部のフータ・トロのウラマーの中には、アラビア語を母語とするモーリタニアの穆斯林との接触をとおしてアラビア語の運用能力にすぐれた者が多くいた。そうした人々が植民地行政官の要求に応じて、さまざまな伝承や文書を編纂したのである。

それらの中で重要な人物としては、Delafosse の依頼で *Chroniques du Fouta Sénégalais* (1913, Henry Gaden によるフランス語訳のみ現存) を書いた Sire Abbas Soh (Kane 2003:14)、Gaden の下で 1923-24 年にセネガル川流域の広範な歴史、地理、風俗を取り扱う *Zuhul al-basatin fi ta'rikh al-sawadin* を書いた Musa Kamara (1864-1943) らがいる (Hunwich 2003:465-466)。Gaden と Delafosse は後者の著作も翻訳・出版を計画したが、あまりの大部のために果せなかった。その後原本はダカールの IFAN (Institut Francais d'Afrique Noire) に収蔵されながら、上述のような理由で長く歴史研究に活用されることがなかった。だが 1990 年代になってフランスの研究者がふたたび現地のアラビア語文書に関心を向けるようになったことによって、ようやくその一部が 1998 年に翻訳出版されている (Kane 2003:15-16)。

ところで William Ponty が総督になると、1911 年に植民地の行政言語としてアラビア語を用いることは禁止された (Harrison 1988:51-52)。そのため植民地の統治にフランス語が用いられたマリでは、現地のウラマーによる新しいアラビア語著作は生まれてきていない。しかしもう一世代後になって、フランス語による教育を受けてダカールの IFAN の研究員となった Amadou Hampaté Bâ (1901-1991) が、J. Daget と共著の形で全面的に口頭伝承に依拠したマーシナのジハード国家の歴史書 *Empire peul du Maçina* (1955) を著している。アラビア語文書と断絶した形での口頭伝承研究は、フランス語圏では Y. Person のサモリ研究 (1968-75) や川田順造のモシ研究のような独自の成果を生み出すことにもなった。

西欧の研究者と現地のウラマーとの協同による歴史研究は、仏領西アフリカとは別の形で英領黄金海岸 (ガーナ) から生まれている。社会人類学の J. Goody と歴史学の I. Wilks は、ともに独立前後のガーナで研究生活をスタートさせた。Goody は 1954 年に北部ガーナの民族学報告書を書いた際に、1920 年代に植民地行政官が現地のウラマーと協力して作成したアラビア語文書を利用した。当時まだ PD の学生だった Wilks は、これを見て現地の文書を利用した歴史研究の可能性を探り始める。そして 1960 年独立ガーナのシクマ大統領の理解を得て、彼は北部ガーナの穆斯林・コミュニティの調査プロジェクトを始め、その範囲をヴォルタ川流域のワガドゥグ、ブナ、ボボジュラソなど、ジュラの町々に拡大し

ていった (Wikis 2011:7-10)。

この研究は、ボボジュラソの Marhaba Sanogo (アラビア文字表記では Saghanugu) との出会いによって大きく進展した。Marhaba Sanogo はジュラのウラマーの高名な家系に生まれ、ジュラのネットワークのなかで学問形成をおこなったが、ガーナで政治活動にコミットしたために国外追放を受け、故郷ボボジュラソに帰還した後に Wilks と出会った。彼は各地の遊学先で意識的に歴史についての情報を収集して文書を執筆し、当時ブルキナファソにはアラビア文字の活版印刷設備がなかったために、北アフリカの出版社で出版している (以上、中尾世治からの情報による)。Wilks はこの Marhaba Sanogo の著作と彼からの聞き取りをベースとして、1968 年の論文 "The Transmission of Islamic Learning in the Western Sudan" を執筆し、それがその後のヴォルタ川流域のイスラーム史研究を方向づけたのである。

この論文の意義は、(a) ヴォルタ川流域のイスラーム史の基礎を作ったこと、(b) ジュラの学問伝統が 15 世紀にジャで活動した al-Hajj Salin Suwari までさかのぼることを明らかにしたこと、(c) 当時まだ学生だったガンビアの Lamin Sanneh とアメリカの T. C. Hunter による 1970 年代のジャカンケ研究を生み出す刺激になったことなどにある。ジャカンケは、同じくマリのジャから al-Hajj Salin Suwari の学問伝統をともなってセネガンビアとギニアのフータ・ジャロンに移住した集団である。Sanneh はジャカンケのウラマーたちが 20 世紀初めに書いた文書を利用して、ジハードを否定するジャカンケの平和主義的イスラームの伝統を研究し (Sanneh 1989, 坂井 2003:199-220)、Hunter は 18 世紀末ギニアのトゥバでジャカンケ独自の神秘主義的教説の中心人物となった Karamoko Ba に由来する asrar 関係の文書群とその活用法に関する貴重な研究をしている (Hunter 1977, 坂井 2003:239-250)。

仏語圏における現地のウラマーと西欧の研究者との交流が、植民地統治上の理由から 20 世紀初頭の一時期間に限定され、その後イスラームがアカデミックな研究対象から外されたために途絶えてしまったのに対して、このように英語圏における交流は、独立前後の時代状況にも助けられて進展し、そこから人類学者と歴史学者が協同するイスラーム研究の下地が形成されることになった。こうした英語圏のイスラーム研究が、N. Levtzion や J. R. Willis らの研究を介してようやくフランスにも受容され、1980 年代末になって、Triaud を中心とする研究グループが *Islam et sociétés au sud du Sahara* 誌を中心に現地のアラビア語文書を用いたイスラーム史研究を始めることになるのである。

### 3) イスラーム教育の近代化

植民地支配下でおこってきたもうひとつの動きとして注目しておきたいのは、1930 年代から始まるイスラーム教育の近代化の試みである。

植民地の間接統治体制にアラビア語使用を組みこみ、アラビア語による法学者養成のための学校も開設した英領の北部ナイジェリア保護領 (Umar 2006) とちがって、イスラーム勢力の政治的無力化をねらった仏領西アフリカでは、上述のように 1911 年以来アラビア語を行政言語に使うことが禁止され、公立学校におけるアラビア語教育もおこなわれなかつ

た。かわりに行政府は、いわゆる「白人学校（人質学校）」という形でフランス語による現地人エリートの育成を目指した。こうしてフランス語による近代教育とアラビア語による伝統的教育とが完全に断絶している中で、1940～50年代にムスリムの側からイスラーム教育の近代化を目指す動きが起こってくる（Brenner 2000a）。

マリで最初にその試みを実行したのは、セグーの Saad Oumar Ture (b.c.1914) である。彼は al-Hajj Omar に付きしたがってマリに移住したトゥクロール人ウラマーの家柄の出だが、1922年に強制的に「白人学校」に入学させられ、そこでフランス語と近代教育法に出会った。卒業後彼は、生家でおこなわれていた伝統的な教育法に疑問を抱き、1946年に行政府の執拗な妨害の中でセグーに仏領西アフリカで最初のマドラサを開校した（坂井インタビュー1993/01/10）。彼はアラビア語とフランス語の両方で多くの著作を残しており、Hunwick はアラビア語 23、フランス語 6 の著作をリストアップしている（Hunwick 2003:244-247）。

同じく「白人学校」出身者の Amadou Hampaté Bâ (1901-1991) は、同時期にバンジャガラでフルベ語、バンバラ語などの地域言語によるイスラーム教育を普及させようと努力していた。それは彼のスーフィズムの師であったトゥクロール人スーフイー、Cerno Bokar Tal が、伝統的に文字教育から遠かった女性や子ども新改宗者などを対象に、口頭フルベ語によるイスラーム教育を施した試みを継承したものである。Hampaté Bâ は、師のフルベ語による講話と教授法を、ムスリム事情局の Marcel Cardaire と共著の形で 1957年にフランス語で出版している（坂井 2015, Hunwick 2003:266-268）。

この二つのケースは、ともに西欧式の近代教育から刺激を受けて伝統的なイスラーム教育を改革しようとした試みであり、文書活動としてみれば、アラビア語の文書システムとフランス語の文書システムとの接触から、一方はアラビア語文書システムの西欧化を目指し、他方は反対にアラビア語文書システムから離脱する方向を目指した。結果的にいえば、前者の試みはその後多くのマドラサの開校につながっていくが、後者（Brenner (2000b) の表現によれば Tijaniyya francophone) は拡大することなく、むしろ *L'Etrange Destin de Wangrin* (Hampaté Bâ 1973, Grand prix littéraire d'Afrique noire 1974) に代表されるような口頭伝承の表現技法を縦横無尽に活用した西アフリカ文学の創出につながっていく。

Hunwick のカタログには、この他 1950年代以降、カイ、シカソなどで同様の試みをした学者たちの文書がリストアップされている（Hunwick 2003:255-257）。植民地支配下でスーフイー教団の活動が目覚ましく活発化したセネガルに対して、マリではこれらの教育改革にムスリムの文書活動に新しい時代に適応しようとする様相を読み取ることができるように思う。

おわりに

以上、大急ぎで西スーダンのウラマーたちの文書活動をふり返ってきた。最後に明らかになったことをいくつか指摘しておこう。

1. 大まかにいえば、マリ・ソンガイ時代の都市部の統治と連動したマーリキー派の法学研究は大帝国が崩壊した17世紀以降に衰退し、かわりにサハラ＝サヘルを舞台にスーフィズムが文書活動を動機づける主要な要因になる。また同時期のニジェール川中流域では、非イスラームの権力が成長してくる中で法学研究に代わって呪術的な文書活動が重要性を帯びてくる。おそらくその中で、ジェンネやジャの学者たちは文書に対する姿勢を変化させている。スーフィズムと呪術はともに文字知識の神秘的・象徴的（バーティンの）な側面に関心を集中するが、それはニジェール川中流域からサヘルにかけて統一国家が存在しない政治状況で、ムスリムの文書活動が神秘主義的な信心業に傾いたことを反映しているだろう。
2. こうした状況に対して、19世紀には文字知識のより現実的・実践的（ザーヒルの）な側面を重視する活動ふたたび伸長してくる。ジハードによって実際にシャリーアが適用されるイスラーム国家を建設しようとする動きである。ソンガイ帝国の統治を理想化した17世紀の年代記は、その動きに一つの指針を与えた。だが19世紀末にサヘルのスーフィズムとニジェール川中流域のジハード国家とが拮抗している状況でフランスの軍事的征服がおこなわれ、両者の文書活動は20世紀に入ると同時に事実上終わってしまう。
3. 植民地支配とともにニジェール川中流域＝マリ中央部の文書活動が不活発な状況に陥ると裏腹に、セネガルでは植民地支配下でスーフィー教団が大量の文書を生産し始める。それは国家の政治権力から排除されたムスリムたちが、植民地の社会と経済をアプロプリエートしつつ再編成していく力強い動きを示しているように感じられる。
4. 植民地支配はまた、ムスリムの文書活動に別の刺激を与えることにもなった。それが現地のウラマーと西欧の研究者との協同による歴史研究である。ただしその現れ方は仏語圏と英語圏でかなり異なっていた。

3と4は、異なる文書システム間の関係としてまとめて考えてみることによって、さらにいくつかの問題点が浮かびあがってくる。すなわち植民地支配下で、英仏語の文書システムとアラビア語の文書システムの接触と交錯が引き起こした、多様な結果の含みもつ以下のような問題点である。

(a) 行政システムのなかで統治言語としてアラビア語が用いられた地域（セネガル、ナイジェリア北部）では既存のアラビア語の文書システムが再帰的に強化されていったこと。

(b) 統治言語としてアラビア語が用いられなかったマリでは、既存のアラビア語の文書システムの中にいた人物がフランス語の文書システムに参入していったこと。(c) 英語圏の北部ガーナでは、既存のアラビア語の文書システムの中にいた人物に歴史学者がアクセスし、その知識を英語に直していったこと。

植民地支配下でおこったこれらの両システムの接触は、ある意味では皮肉な結果を招いている。すなわちセネガルの場合のようにアラビア語のシステムが印刷技術を獲得したケースでは、両者はふたたび分離して、フランス語の文書システムから隔離された大量の宗

教文書が流通する固有の空間が生み出された。反対に英仏の研究者が現地の知識を利用・吸収したケースでは、アラビア語から英仏語への知識の不可逆的な（一方的な）移動が引き起こされ、ここでも二つのシステムの不幸な乖離がおきている。

このような経過をたどりながら、1990年代以降、西欧のアカデミズムの世界では英仏の人類学者・歴史学者が合流し、西アフリカ・イスラーム研究の共通のプラットフォームができてきた。2003年のHunwickによるカタログの出版は、その成果を象徴する出来事といえるだろう。一方それとは独立に、西欧との接触をとおしてアラビア語による近代教育を受けたマドラサ出身者や中東への留学経験者、あるいはセネガルのスーフィー教団の中からも、新しい世代のウラマーたちが養成されてきている。これら新世代のウラマーたちが生み出す知識と西欧のアカデミズムの知識との間で、どのような形で交流を作り出しどのような歴史認識を生み出すことができるか、今後の西アフリカ・イスラーム研究者の大きな課題になるだろう。

#### 文献

Bâ, Amadou Hampaté et Jaques Daget

1955(1984) *L'Empire peul du Maçina*, Paris, Les Nouvelles Editions Africaines.

Bloom, Jonathan

2008 Paper in Sudanic Africa. In Jeppie, S. and S. Diagne (eds.) *The Meanings of Timbuktu*. Cape Town: HSRC Press.

Brenner, Louis

2000a *Controlling Knowledge: Religion, power and Schooling in a West African Muslim Society*, London, Hurst & Company.

2000b Amadou Hampate Ba: tijâni francophone, in J. -L. Triaud and D. Robinson (eds.) *La Tijâniyya: une contréiemusulmane à la conanquête de l'Afrique*, Paris, Karthala.

Goody, Jack (ed.)

1968 *Literacy in Traditional Societies*, Cambridge Univ. Press.

1988 *France and Islam in West Africa, 1860-1960*, Cambridge Univ. Press.

Hunter, T. C.

1977 *The Development of an Islamic Tradition of Learning among the Jakhanka of West Africa*, unpublished Ph. D. dissertation, The University of Chicago.

Hunwick, John O. (ed.)

2003 *The Writings of Western Sudanic Africa, Arabic Literature of Africa*, vol.4, Leiden, Brill.

Kane, Ousmane

2003 *Intellectuels non europhones*, Document de travail, Conceil pour le développement



de la recherche en sciences sociales an Afrique (CODERSIA), Dakar,  
newwebsite.codesria.org.

Levtzion, Nehemia

1971 A Seventeenth-century chronicle by Ibn al-Mukhtar: a critical study of *Ta'rikh al-Fattash*, *Bulletin of SOAS*, 34(3).

中村雄祐

2009a 「発展途上国における文書と生存—ボリビアの職業訓練工房におけるアクション・リサーチの試み」、斎藤晃編『テキストと人文学』:135-152、人文書院。

2009b 『生きるための読み書き—発展途上国のリテラシー問題』、みすず書房。

Ong, Walter, J.

1982 *Orality and literacy : the technologizing of the word*, 桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』、1991、藤原書店。

Robinson, David et Jean-Louis Triaud (eds.)

1997 *Le Temps des marabouts : itinéraires et stratégies islamiques en Afrique occidentale française v.1880-1960*, Paris, Karthala.

坂井信三

1986 「訳者あとがき」、M. グリオール、G. ディテルラン著『青い狐——ドゴンの宇宙哲学』、せりか書房。

1994 *Alfa Boari Karabenta de Dia, Islam et Sociétés au sud du Sahara*, 8.

1997 「口頭伝承からみたジャ——異教王権下のイスラーム都市の歴史と構造」、川田順造編『ニジェール川大湾曲部』、東京大学出版会。

2003 『イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク』、世界思想社。

2005 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」、赤堀雅幸、東長靖、非理皮徹編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』、東京大学出版会。

2015 「仏領西アフリカ植民地におけるクリスチャンとムスリム—テオドール・モノとアマドゥ・ハンパテ・バー」、上智大学イスラーム研究センター「アジア・アフリカにおける諸宗教の関係の歴史と現状」での口頭発表、2015/01/16。

Salvaing, Bernard

2003 “Writers of Futa Jallon, introduction”, in Hunwich (ed.) 2003.

Sanneh, Lamin

1989 *The Jakhanke Muslim Clerics : a religious and historical study of Islam in Snegambia*, University Press of America.

Triaud, Jean-Louis

- 2010 L'islam au sud du Sahara, une saison orientaliste en Afrique occidentale : constitution d'un champ scientifique, héritages et transmission, *Cahier d'Etudes Africaines*, 2010/2-3-4, n.198-199-200, pp.970-950.
- 2014 Giving a Name to Islam South of Sahara: an Adventure in Taxonomy, *Journal of African History*,55, pp.3-15.
- Umar, Muhammad Sani
- 2006 *Islam and Colonialism : Intellectual Responses of Muslims of Northern Nigeria to British Colonial Rule*, Leiden, Brill.
- Wilks, Ivor
- 1968 The Transmission of Islamic Learning in the Western Sudan, in J. Goody (ed.) 1968.
- 2011 Al-Hajj Salim Suwari and the Suwaris: a Search for Sources, *Transactions of the Historical Society of Ghana*, new series, n.13, pp.1-79.
- Wilks, Ivor, Nehemia Levtzion and Bruce M. Haight
- 1986 *Chronicles from Gonja: a tradition of West African Muslim Historiography*, Cambridge University Press.